愛知用水夢物語

その水の先に

持ち続けたい先人への感謝の思い

愛知用水取入口（岐阜県八百津町）

知多半島の水不足

知多半島は、大きな河川もなく、また、年間を通して降雨量が少ないため、昭和30年代まで毎年のように干ばつに見舞われていました。

この地域では、昔からため池などに雨水をため、時には地下水をつるべで水をくみ上げ、耕作に利用していました。

そのため、木曽川の豊富な水を知多半島へ引くことは、農家の人たちの長年の夢でした。

戦後の大干ばつと愛知用水運動

昭和22年、知多半島を大干ばつが襲い、農作物が枯れるなどの大きな被害が出ました。終戦直後で、国内は食料が不足し、国民全てが飢えに苦しんでいる時期でした。

これを機に、知多の農家の久野庄太郎さんは、農家の仲間と、木曽川から知多半島まで水を引くという愛知用水の実現に向け、用水運動を起こしました。この運動に共感し、協力したのが、当時安城農林学校で教員をしていた濱島辰雄さんでした。

濱島さんは、木曽川から知多半島まで現地調査を行い、わずか3カ月で「愛知用水概要図」（4ページ）を作り上げました。この概要図は、その後に実際に建設された愛知用水幹線水路の位置とほとんど変わらない内容でした。

用水運動は「知多半島へ農業用水を」という農民の願いに加え、中京圏の飲料水と工業用水の確保という地域全体が発展するための壮大な夢に膨らんでいました。

この夢を実現するため、二人は農林省（当時）へ愛知用水建設の陳情に行き、それは当時の吉田茂首相の耳にも入りました。吉田首相への陳情の機会を得た二人は、「愛知用水概要図」を広げて愛知用水の実現を訴え、農民の夢が国の事業として動き出すこととなりました。

地下水をつるべでくみ上げる※

牧尾ダム（長野県王滝村）※

戦後初、国家の一大事業

愛知用水は、水源地となる長野県王滝村と木曽町におけるダム建設、岐阜県八百津町で木曽川から水を取り入れる兼山取水口から南知多町までを自然流下する幹線水路112キロメートルとその支線水路1,012キロメートルの建設、幹線水路の水を調整するための調整池の造成、そして用地の取得などを行うものでした。

これは、昭和のピラミッド建設といえるほど壮大な事業で、戦後の疲弊した日本単独では実現できないほど莫大な費用が必要でした。

建設に伴う費用の一部は、世界銀行から融資を受けることとしましたが、借り入れの条件として「5カ年で事業を完成させること」「海外専門家の技術援助を求めること」などが付されました。

昭和30年、事業の主体となる愛知用水公団（現在の水資源機構）が設立されました。

事業の実施に当たっては、当時最先端の技術と建設機材を保有していたアメリカ合衆国のエリック・フロアー社（EFA）とコンサルタント契約を結びました。EFAは、大型

※の写真は「独立行政法人水資源機構愛知用水総合管理所」提供

土木機械の使用や設計技術の標準化のみならず、安全への意識など、その後の日本の土木技術に大きな影響をもたらしました。

昭和32年には、水源地となる牧尾ダムと、木曽川から取水する兼山取水口と、水を流す水路の工事が始められました。

ＥＦＡと日本の技術者は、優れたノウハウと最新鋭の重機を使い、起伏のある地形に人工河川ともいえる愛知用水を、わずか4年で完成させました。

日米の技術者が工事を進めた※

そして、昭和36年9月30日には、木曽川の水が１００キロメートル余の愛知用水を流下し、知多半島の先まで届きました。久野さんと濱島さん、そして知多半島の農民の夢が、長い年月を経て実現した日でした。

愛知用水が潤したもの

総合利水計画として行われた愛知用水は、農業用水、飲料水、工業用水をこの地域に届けています。

愛知用水概要図※（濱島辰雄氏製作）

愛知用水取入口
（岐阜県八百津町）
兼山ダム貯水池の取水口から112キロメートル先の知多半島先端まで木曽の水が送られています。

愛知用水完工記念碑
愛知用水公団初代総裁の濱口雄彦氏の碑銘が刻まれています。
「この木曽の水は　百年の夢をうつつに愛知用水として濃尾の野をうるほすゆくてに幸多かれ」

建設中の東郷調整池（愛知池）※
写真中段の傾斜部分が堤防、奥が調整池です。

※とうごうチャンネル８月号は、愛知用水をテーマに放送します。詳しくは、裏面をご覧ください。

農業用水としては、岐阜県の一部と尾張東北部、西三河西部および知多半島の先端まで約1万5千ヘクタールの農地で稲や野菜などの作物を育てるのに使用されています。

また、尾張東部浄水場などできれいにされた水は、東郷町を含む11市町の80万人以上の家庭に届けられています。

そして、元気な愛知を支える名古屋臨海工業地帯などの約80社で、工業用水が利用されています。

愛知用水の水の利用状況を昭和38年と平成22年で比べると、農業用水が65％から20％に、飲料水が9％から26％に、工業用水が26％から54％に変化しています。

また、年間使用水量は、1・4億立法メートルから4・6億立法メートルに増加しています。

ものづくり愛知の発展に伴い、愛知用水の水が工業用水として多く利用され、ますますこの地域に欠かせないものとなっています。

愛知池の役割

東郷町、日進市、みよし市にまたがる愛知池は、愛知用水の中間地点に位置し、正式には東郷調整池といいます。

愛知用水は、ポンプなどの動力を一切使わず、高低差を利用し、水源地から知多半島まで水を流しています。

愛知池は、上流の水をいったん貯めて、水量を調節しながら下流へ流しています。人間でいうと、胃袋のような役割で、愛知用水には欠かせない存在です。

また、愛知池周回路でのウォーキングや湖面でのレガッタなど、健康づくりと憩いの場として町民の皆さんにとっても、愛知池は、重要な役割を果たしています。

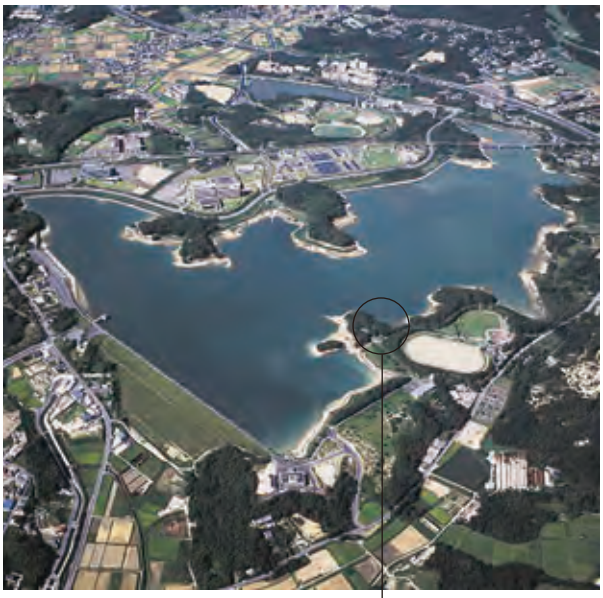
忘れてはいけない感謝の気持ち

愛知用水計画の実現には、多くの人の協力と犠牲がありました。

建設に際しては56人もの殉職者があり、その慰霊の碑や観音像が各地に建てられました。

水源地ではダムの底にふるさとが沈んでしまった人が、水路や調整池などでは大切な土地を手放した人が、数多くいました。

私たちは、先人の犠牲や努力に対して感謝の気持ちを持ち続け、常に水を大切にする心を忘れてはいけません。



東郷調整池（愛知池）※

観音像

建設に携わった技術者の思い

食糧の増産は、終戦後の日本において最重要目標の一つでした。私は、終戦後に食糧増産計画を所管する農林省（当時）の開拓局に技術者として入りました。

当時、久野庄太郎さんと濱島辰雄さんが中心となった愛知用水建設の陳情が吉田茂首相に行われ、愛知用水計画が動き出しました。

私は、計画づくりに参加し、その後愛知用水公団に出向。戦後日本の一大事業である愛知用水事業に技術者の一人として参加しました。

愛知用水の中間地点に位置する愛知池は、水を調整する大切な役割を果たしています。当時は、諸輪地区で大変な反対運動がありましたが、最後には地権者の皆さんの協力が得られ、愛知池を造ることができました。

私たちは、水源地の皆さん、愛知用水、 愛知池の用地の所有者の皆さんの犠牲と協力があって、現在、当たり前のように水を利用できているということを決して忘れてはいけません。

山田光敏さん（和合ケ丘）

※の写真は「独立行政法人水資源機構愛知用水総合管理所」提供